

「バディ」と「デラシネ」

野瀬 隆平

文章の中に出てくる単語を知らない、内容を的確に読み取することはできない。特に、その単語がキーとなるような時はそうだ。英文解釈で知らない単語がでてきて、頭をかかえた経験を思い出す。

長年親しんできた日本語の文章では、知らない言葉に出くわすことは稀になってきた。あったとしても、前後の文や全体の文脈からおおよその意味は把握できる。

新聞を広げていたら、ある見出しに目に留まった。大きな活字で、「あの夏の デラシネ」とある。

あれ、デラシネってなんだったかな。本文を読めばわかるだろうと思って読み始めたが、なかなかこの単語が出てこない。最後の方に「棄民」のことだと書いてある。「あの夏」とは終戦の日のこと。寄稿者である五木寛之は、平壤で家族と共にその日を迎えた。中学一年生の時である。

ソ連軍が進駐してきて大変な苦勞を強いられるが、国は何も助けてくれない。それまで身もちも捧げようと思っていた国に、棄てられたのである。彼はこれを「デラシネ」と称しているのだ。着の身着のまままで引き揚げてきた五木は、生き延びるための本当の戦いがここから始まったと云うのである。

前の夜、読んだ本にも、知らない言葉が出てきた。「バディ」である。溺れかけた人をどう助けるかを書いた文章の中に、いきなり「バディを組んで尻を支えると」の表現が出てきた。よく解らぬままに眠ってしまった。

朝食後、「広辞苑」を引いてみると、このカタカナの単語は二つとも出ていた。自分の知識が足りなかっただけのことか。

「バディ」とは、二人組の一方、なかま、相棒のこと。「デラシネ」は語源がフランス語で、根なし草、故郷を喪失した人の意とある。

何故デラシネという一般にはあまり使われない単語をタイトルに入れたのか。読者の注目を引くためだろうか。確かに、この言葉が目に入らなければ、コラムを読んでいなかったかも知れない。

調べてみたら、彼の著作の中に『デラシネの旗』というのがあった。